

346
1/17

東北振興會調查報告

甲部第七號

水產業



始



余や、東北に生まれ、東北地方の不振を嘆ずること茲に年あり、然るに曩日余が敬慕する、澁澤男爵益田孝兩先生より、東北振興會の爲に東北地方の調査を爲すべく委囑せらる、余や淺學非才敢て當らざるを以て固辭せしと雖も、兩先生よりの懇篤なる諭言と、余が東北人たるの立場よりして、之を固辭するの禮に非らざるを信じ、大日本蠶絲會頭の許可を得て、余が鞅掌する大日本蠶絲會々務の傍之に従ふことゝなせり、而して爾來宮下辰雄氏の熱心なる助力を得て、東北地方産業方面に於ける各般の調査を行ふ、然れども材料不備殊に急速を貴びしを以て、粗漏杜撰の責は免れざる所なり、今調査の結了せし方面より順次剗刷に附して參考に供し、敢て大方の指摘を待て

大正
4. 10. 28
内交

訂正する所あらんとす、幸に示教を吝むなからんことを、終に
臨み資料を供給せられたる官廳及各位に對して深く謝意を
表す

大正四年九月

吉池慶正

東北振興會調查報告目次

水産業

第一 漁場	一頁
第二 漁業戸口	五
第三 漁船	九
第四 養殖	一四
第五 遠洋漁業	一九
第六 水産物加工	二二
第七 製鹽	二五
第八 漁獲物	二六
第九 水産	二八
第十 免許漁業	三四

第一 漁場

水産界に於ける業態の現象は他の生産の場合に於けると著しく異なるものあり然り而して水産界を場所に依り大別して海洋及陸水の二となし陸水は更に之を河川及湖沼に分てり此に所謂漁場とは右の海洋及陸水を總稱するものに外ならずして夫の農業界等に於て土地を指すと同一の意義に倣ひ便宜上漁場の稱を適用することとなせり素より之を以て妥當なりと言ふへからず抑東北の外廓たるや東は太平洋に西は日本海に臨み北は津輕海峽に依りて北海に連接し輒ち南方關東の内陸に接續するの外三方孰も海なるか故に漁業を營むべきの地方亦決して尠なしとせず今漁場の廣狹を推測する参考に資せむか爲東北地方と全國及

東北振興會調查報告

水産業

第一 漁場



水産界に於ける業態の現象は他の生産の場合に於けると著しく異なるものあり然り而して水産界を場所に依り大別して海洋及陸水の二となし陸水は更に之を河川及湖沼に分てり此に所謂漁場とは右の海洋及陸水を總稱するものに外ならずして夫の農業界等に於て土地を指すと同一の意義に倣ひ便宜上漁場の稱を適用することとなせり素より之を以て妥當なりと言ふへからず抑東北の外廓たるや東は太平洋に西は日本海に臨み北は津輕海峽に依りて北海に連接し輒ち南方關東の内陸に接續するの外三方孰も海なるか故に漁業を營むべきの地方亦決して尠なしとせず今漁場の廣狹を推測する参考に資せむか爲東北地方と全國及

九州地方との海岸線の長さを比較せむか。

二

海岸線長さの比較

	海岸線の長さ	全国に對する歩合	海岸線一里に對する面積
東北	五二七	七六	八三 ^{方里}
全 國	六、八八五	一〇〇、〇	三、六
九 州	一、六四四	二三、九	一、六

即ち海岸線の長さは東北は五百二十七里、九州は一千六百四十四里にして全国の六千八百八十五里に對し東北は七分、九州は二割三分の割合なるを以て東北は九州の約三分の一に過ぎず従て漁場の範圍も狭小なるは數の免れざる所ならん更に之を東北六縣の各縣別に就きて表示すれば左表の如し。

東北六縣海岸線の長さ

	海岸線の長さ	海岸線一里に對する面積
福 島 縣	三六 ^{方里}	二四、九
宮 城 縣	一五八	三、一
岩 手 縣	八〇	一三、〇
青 森 縣	一七〇	三、七

秋 田 縣
山 形 縣

六〇
二三

一一、二
二五、九

東北六縣中沿海地の長大なるは青森、宮城の二縣にして陸地の面積に對する海岸線の割合、全國平均と殆と接近し岩手、秋田の二縣之に次ぎ福島、山形の二縣は遙に及ばず東北は其の位置の關係上海洋の利を享くる程度は九州に比すれば遠く相及はざるか如しと雖も陸水の利用に於ては九州に比し遙かに優れるものあり輒ち河川にありては阿賀川、荒川、最上川、子吉川、雄物川、米代川、岩木川、相坂川、馬淵川、北上川、鳴瀬川、名取川、阿武隈川等の大河川を有し之か支流亦尠なしとせず更に湖沼にありては猪苗代湖、田澤湖、八郎瀉、十三瀉、十和田湖、小河原沼等の大湖沼あり尙ほ此の外小湖沼の多きこと舉げて算ふへからずされは東北は河川、湖沼を水産業に利用し人工養殖の増進を圖るに最も有望なるへし而して水界は陸界と異なり之を整理して生産の増加を計ること能はず唯其の集約的利用の途に至りては假令陸界の如くに周到ならずとするも尙之を行ひ得るの餘地あり例へば昔時において水は水面下一定の深度に集來游泳せる水族のみを採捕するに過ぎざりしか現

三

時に於ては「トロール」漁業等の漁法に依り同一面積より更に多くの漁獲を得るか如きはなり然れども水界は陸界に比し報酬遞減の法則に支配せらるること一層現實にして且つ速かなるか故に集約的利用も亦久しからずして其の限界に達し新に漁場の開拓を企つるに依りて收穫を増加するの他に途なきに至るへし茲に於て乎沿岸漁業は近海漁業に近海漁業は漸次遠洋漁業に推移せむとするものにして是れ蓋し當然の趨勢と言はざるへからず輒ち東北の漁業も將來此の趨勢に従て發展の策を講せざるべからざるなり。

四

第二 漁業戸口

東北に於ける漁村の存在は九市七十四郡中一市二十五郡に亘る即ち福島縣にありては石城、雙葉、相馬の三郡、宮城縣にありては亘理、名取、宮城、桃生、牡鹿、本吉の六郡、岩手縣にありては氣仙、上閉伊、下閉伊、九戸の四郡、青森縣にありては青森市及三戸、上北、下北、東津輕、西津輕、北津輕の六郡、秋田縣にありては山本、南秋田、河邊、由利の四郡、山形縣にありては飽海、西田川の二郡なりとす元來漁村に於ける戸口の増減は大體に於ては農村に於ける状態と同軌を辿るか如しと雖も漁村は農村と異なり其の運命を支配するものは土地にあらずして水界にあり水界は陸界に比するときは自然の影響を受くること遙かに大なるのみならず其の生業たるや之を農林其の他の諸業に比すれば危険の虞多きか故に平素の貯蓄心に乏しく漁獲豐饒なるときは徒らに放縱遊惰の生活に耽り一朝不獵に遭遇するときは忽にして饑餓の慘狀に陥ること決して稀なりとせずかゝる生活状態なるを以て漁村の盛衰興廢は殆んど測り知るべからざるものあり今東北地方の漁業戸口と全國及九州

五

地方の其れとを比較すれば左の如し。

漁業戸口比較

東 北	漁業戸数		計	漁業人口		計	全国に對する歩合	
	専業	兼業		専業	兼業		戸数	人口
全 國	10,031	33,455	43,507	8,160	6,687	14,847	8.3%	9.6%
九 州	3,030	29,951	32,981	10,717	9,003	19,720	10.0%	10.0%
東 北	1,031	8,011	9,042	3,757	2,957	6,714	3.3%	3.3%

漁業戸口に就きては全国に亘りて調査したるものは大正元年農商務省水産局の調査に係る水産統計年鑑に依るの外他に資料を得難く即ち明治四十一年十二月末現在の地方廳報告に基きたるものを採りて右に表示せり之に依りて觀れば漁業戸数は東北は四萬三千五百七戸九州は十二萬三千四百七十一戸にして全国の五十二萬九千七百一戸に比し東北は八%二九州は二三%三、漁業人口は東北は十六萬八千二百八十六人九州は四十萬四千六百六十五人にして全国の百七十四萬七百七十人に對し東北は九%六、九州は二三%二に當り輒ち東北の漁業戸口は九州の其れの約三分の一に過ぎずして恰も夫の海岸線の長さの比較に於けると相

等しきことを知る更に東北六縣の各縣別漁業戸口を示せば左の如し。

東北六縣漁業戸口

縣 名	漁業戸数		計	漁業人口		計
	専業	兼業		専業	兼業	
福 島 縣	一、六四九	二、七二一	四、三七〇	五、〇九〇	七、一三五	一二、二二五
宮 城 縣	四、六六一	四、〇六六	八、七二七	一五、一六四	八、六八三	二三、八四七
岩 手 縣	二、二二六	六、二六八	八、四九四	一四、六九二	四一、三六九	五六、〇六一
青 森 縣	七、二七一	四、一二七	一一、三九八	二八、七一一	一四、二三〇	四二、九四五
秋 田 縣	二、三三七	三、八八六	六、二六三	八、二三四	一〇、一三九	一八、三七三
山 形 縣	一、八八八	二、三六七	四、二五五	九、七四五	五、〇九〇	一四、八三五

即ち漁業戸数の最も多きは青森縣にして宮城、岩手の二縣之に次ぎ最も寡なきは山形縣なりとす更に明治四十一年より大正二年に至る六個年間に於ける各縣別の漁業戸数を掲ぐれば左表の如くにして一張一弛比年特に注意を喚起すべき現象を認めざるなり

東北六縣漁業戸数累年比較

年 次	福 島 縣	宮 城 縣	岩 手 縣	青 森 縣	秋 田 縣	山 形 縣	計
明治四十一年	四、三七〇	八、七二七	八、四九四	一一、三九八	六、二六三	四、二五五	四三、五〇七
明治四十二年	四、七八五	一〇、〇五一	一五、九五六	一一、七二三	八、〇〇五	四、二五七	五四、七六七

明治四十三年	四、九二三	一一、三七五	一〇、五一	一一、七八七	六、六六二	四、二六八	四九、五二六
明治四十四年	四、九四三	一一、五六六	九、六七〇	一二、三九一	六、二三二	四、二一八	四九、〇二〇
大正元年	四、二五六	一一、五四四	一〇、六七六	一二、八七九	六、〇〇〇	四、二九七	四九、六五二
大正二年	三、五七〇	一一、五九九	一〇、五五七	一二、九五四	六、〇〇〇	四、二九七	四八、九七七

秋田、山形の二縣よりは、大正二年の資料を得ざるに依り、同年の數は前年の實數を以て補充することとせり。

東北の漁村は之を右の統計に徴するに著しき盛衰なきものの如しと雖も其の分布區域は一市二十五郡に亘り戸數四萬餘人口十六萬餘を算するに替ふれば將來之か保持の途に就きては遺算なきを期せざるへからざるなり更に更に東北の漁業戸口を敍説するに當り看過すへからざるは年々歳々東北地方より北海道、樺太及露領沿海州等に出稼する漁夫の數夥しきものあること是なり其の出稼漁夫の最も多きは秋田縣にして今大正二年の實人員を聞くに北海道に一萬三千八百三十七人樺太に二千六百四十一人露領沿海州に百四十八人合計一萬六千六百二十六人を算す是に由りて之を觀れば東北漁業の勞力は決して之に乏しとせず唯た之を利用すへき企劃の未だ起らざることを憾みとするものなり。

第三 漁 船

從來我邦に於ては艫楫及小帆を使用して釣漁、網漁、又は雜漁業に従事する沿海漁船殆んと其の大部分を占め動力を使用する遠洋漁船の如きは極めて尠なし就中東北の如きは最も小規模の沿岸漁業を營むに過ぎされは其の漁船の設備も完からざること之を推知するに難からず今東北地方と全國及九州地方の漁船に就きて比較を試みむか。

日 本 船	五 間 以 上		五 間 未 滿		計
	發 動 機 を 有 す る も の	發 動 機 を 有 せ ざ る も の	發 動 機 を 有 す る も の	發 動 機 を 有 せ ざ る も の	
東 北	一、五八二	一四、二二一	一九、五六七	三五、五二五	
全 國	一、一一九	三〇、八七五	一二八、二二九	四一四、一一二	
九 州	一、三三四	三七一	五、五七〇	六六、八五二	
汽 船					一三
帆 船					三〇
計					四三

全 國	一三三	三九五	三二七	一〇
九 州	六二	一四	一二	八五五
				八八

右の調査に依れば東北の漁船数は九州の其れの約半数に過ぎず殊に汽船にありては九州は全国の半数を占むるに東北は絶無なるに鑑みれば其の規模は殆んど同日にして語るべからざるなり更に大正二年に於ける新造船に就きて見むか即ち左の如きものあり。

新造漁船 (大正二年中)

東 北	船 数	概 價	船 数	概 價	概 價 合 計
全 國	三、〇四八	三九二、六三一	二	三、〇〇〇	三九五、六八一
九 州	二九、五一二	二、七五五、四四八	六八	三三九、七八八	三、一五、二三六
	五、二八四	五〇三、四五四	七	二二一、〇〇〇	七二四、四五四

新造漁船の概價を比較するときは東北は三十九萬五千六百八十一圓九州は七十二萬四千四百五十四圓にして之を全国の三百十一萬五千二百三十六圓に對すれば東北は一割三分九州は二割三分に當り即ち東北は九州の約二分の一に過ぎず更に東北六縣の詳細を表示すれば左の如し。

東北六縣漁船實數 (大正二年末現在)

福 島 縣	二八	一〇七	三七二	二、一八〇	二、六八七
宮 城 縣	一三	一七六	二、三六九	八、一四九	一〇、七〇七
岩 手 縣	一〇六	三三二	二、一五一	二、一九四	四、七七三
青 森 縣	二	六八四	五、六四九	四、二一九	一〇、五五四
秋 田 縣	五	一一	一、五八七	二、一二二	三、七二六
山 形 縣	一	二八一	二、〇九三	七〇三	三、〇七八
西 洋 形 船					
汽 船					
帆 船					
計					

東北六縣新造漁船 (大正二年中)

福 島 縣	一	一	一	一	一
宮 城 縣	一	一	一	一	一
岩 手 縣	一	一	一	一	一
青 森 縣	一	一	一	一	一
秋 田 縣	一	一	一	一	一
山 形 縣	一	一	一	一	一
計	六	六	六	六	六

山形縣	秋田縣	青森縣	岩手縣	宮城縣	福島縣	日本形船		西洋形船		概價計
						船數	概價	船數	概價	
三〇三	一六〇	九四八	四七五	九七五	一八七	二〇、五八四	七四、五三六	二	三、〇〇〇	七四、五三六
										一〇二、九八四
										一三五、五二九
										五〇、六二八
										一一、三七〇
										二〇、五八四

凡そ漁船の構造は漁業の種類、漁場の範圍、氣象の關係、漁港の設備、漁民の資力等を考量して之を定むべきものにして規模の大なるもの必ずしも有利なりとせず規模の小なるもの必ずしも不利なりとなさず、輒ち東北地方に於ける漁船の多くは小規模の扁舟なるも之れ第一大規模の西洋形漁船の繋留に適する漁港に乏しきこと第二漁場の範圍主として沿岸に止まれること第三漁業者の資力の貧弱なること等は蓋し其の重なる原因ならむか然れとも近時沿岸に於ける水族漸減の影響として漁場の範圍は漸次擴張せられ遠洋漁業を企劃すへき必要に迫り、竟に従來の沿岸漁船を以てしては擧げなからざる不便を感ずるに至るは、賭易き所

なり、即ち將來東北漁業の發展を期せむと欲せば、先づ第一に漁船の設備を海洋漁業に適せしむる方法を講せざるべからず、従つて多額の漁業資金を要するは、多言を要せざる所なり。

第四 養殖

人口の増殖率寡少にして交通機關の發達せざりし時代に在りては天與の恩惠物は水陸到る處に饒多にして供給餘りありて需要寧ろ之れに伴はざるの狀態なりしを以て水産物の如きも自然の生産に満足して人為を加へて養殖を圖るか如きことは固より其の必要を認めざりしか人口の増殖に伴ひ食料品の需用益々多きを加へ管に農産物のみならず水産物も亦著しく其の需用を増加し従つて之に應せむか爲漁場の範圍を擴張し又精巧なる漁具の發明と漁法の進歩に依り海洋漁業の發達著しきものあり延いて沿岸水族の漸減を來たすなきを保せず茲に於て乎一面法令又は漁業團體の規約等の方に賴り蕃殖保護の途を講し又一面に於ては陸水養殖の奨励に勗むるに至れるなり而して陸水養殖の業たるや海洋漁業と異なり副業として之を營むの利便あるを以て近時到る處年を逐ふて増進の趨勢に在り今東北地方に於ける陸水養殖事業と全國及九州地方の其れとを比較せむか

養殖場面積比較

東 北	公有水面		私有水面		計
	養殖場數	養殖面積	養殖場數	養殖面積	
東 北	五九五	三五、〇四七、五九一	一、三二四	五九三、三五七	一、九一九
全 國	六、〇五〇	一一一、四九三、二六六	二五、五一一、七二三	七三、二八八	一四七、〇〇六、九八九
九 州	一、五一一	一八、二四〇、六〇五	二、四四二	一、〇二二、七五六	三、九五三
					一九、二六三、三六一

養殖場の數に於ては東北は九州より尠なしと雖も其の面積に於ては九州より遙かに多くして之か一養殖場の平均面積を比較すれば東北は一萬八千五百七十二坪全國は二千六坪九州は四千八百七十三坪にして東北の養殖場は之を全國平均に比するも九州平均に比するも著しく大面積なることを知る吾人は前項に於て東北地方は陸水漁場に富み人工養殖を増進するに有望なることを述べたるか輒ち此の比較に徴するも其の然るものあるを信するものなり然らば之か收穫にありては奈何左に之を比較せむとす。

養殖收穫高比較 (大正二年)

東 北	公有水面		私有水面		計
	收穫高	收穫量	收穫高	收穫量	
東 北	一〇五、六四八	一五〇、二四六	四四、五九八	一五〇、二四六	一五
					全國に對する歩合
					三六

全 國 二、九八六、一〇三 一、一六四、六八三 四、一五〇、七八六 一〇〇、〇
九州 三三五、九七〇 二七、二八一 三六三、二五一 八、八

此の比較に徴すれば東北の養殖收穫高は九州の二分の一に達せず即ち養殖場の面積にありては東北は九州よりも遙に多くして之か收穫高は九州よりも著しく劣れるに譬ふれば東北の養殖業は將來尙ほ大に發展の餘地を存すること疑を要せざるなり更に東北各縣別の養殖に就きて表示すれば左の如し。

東北六縣養殖場面積 (大正二年未現在)

縣名	公有水面		私有水面		計
	養殖場數	養殖場面積	養殖場數	養殖場面積	
福島縣	九四	六五三、九二三	五六四	一六七、三三八	六五八
宮城縣	三八二	一、三一六、三〇七	二三五	一二七、四二五	六一七
岩手縣	三六	一八八、五八九	三〇八	六五、七七一	三四四
青森縣	一	二一、〇〇〇	三六	二七、二〇〇	三七
秋田縣	四五	三三三、五四九	一一七	一五六、九八一	一六二
山形縣	三七	五三一、二二三	六四	四八、六四二	一〇一
計					
公有水面		五、二五七		六、九六五	一二、二二二
私有水面					八、八
計					二一、一〇四

東北六縣養殖收穫高 (大正二年)

宮城縣	六九、一四〇	一一、七三七	八一、八七七
岩手縣	一一、二七八	三四三	一一、六二一
青森縣	六	五五〇	五五六
秋田縣	一三、八一三	九、七九一	二三、六〇四
山形縣	六、一五九	一四、二二二	二〇、三七一

前表に依れば養殖場面積の最も多きは秋田の三千二百四十九萬三千餘坪にして他は之より遙に寡なく宮城の百四十四萬三千餘坪、福島の八十二萬一千餘坪、山形の五十七萬九千餘坪、青森の四萬八千餘坪の順位なりとす而して又收穫高の最も多きは宮城の八萬一千八百餘坪にして他は遙かに下り秋田は二萬三千六百餘坪、山形は二萬三百餘坪、福島は一萬二千二百餘坪、岩手は一萬一千六百餘坪、青森は五百餘坪にして各縣の較差著しきものあり是れ事業の規模に大小あり又漁場の適否の關係もあるへく單に計數上の比較を以て其の優劣を斷すへからざるなり。東北地方に於て從來行はるゝ養殖水族の主なるものは鯉、鰻等にして又近時猪苗代湖、十和田湖其の他の大湖沼に於て鱒の孵化養殖を試みるに至り其の成績に徴すれば將來有望なるものゝ如し而して農家の副業として稻田養鯉を爲すもの

あるも極めて微々たるものに過ぎざるなり今其の面積及收穫高を掲げて参考と爲さん。

稻田養鯉面積及收穫高 (大正二年)

東 北 各 縣	面積		收穫高	
	面積	收穫高	面積	收穫高
福 島 縣	一九〇,二三一	一四,二〇九	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇
宮 城 縣	八,二九四,〇六九	一六六,一三四	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇
岩 手 縣	一〇九,七二九	七,八一三	一,三	四,七
全 國				
東 北 各 縣				
全 國				

更に之か東北各縣の實數を示せば左の如し。

東北六縣稻田養鯉面積及收穫高 (大正二年)

縣 名	面積	收穫高
福 島 縣	九,五〇一	五二二
宮 城 縣	六,三三五	一,二六二
岩 手 縣	四,八四〇	二一八
青 森 縣	二四,〇〇〇	五〇〇
秋 田 縣	一三九,八一〇	八,六七四
山 形 縣	五,七四五	三,六七四

第五 遠洋漁業

西南地方の漁業者は朝鮮沿海、關東州沿海等に遠洋漁業を爲すもの尠なしとせざるも東北の漁業者には遠洋漁業を爲すもの殆ど之れなく唯た宮城、岩手の二縣に於て僅に近海漁業を營むもの之れある而已今遠洋漁業に就きて東北と全國及九州との漁船及従業者を掲ぐれば左の如し。

遠洋漁業漁船従業者比較 (大正二年)

東 北 各 縣	日 本 形 帆 船		西 洋 形 帆 船		汽 船	
	船數	乘組員數	船數	噸數	船數	噸數
福 島 縣	六二四	六,二五三	二七	五〇三	一一	一,二四七
宮 城 縣	五,九二五	三五,〇三三	三五三	一四,三一九	一八三	四五,七一七
岩 手 縣	二,〇四八	一〇,八五〇	一	四九	三六	八,一一八
全 國						
東 北 各 縣						
全 國						

即ち遠洋漁業に従事する者東北は九州に比し著しく寡小なること前表に示す所の如し尙ほ其の漁獲物の價額に就きて見むか。

遠洋漁業漁獲物比較 (大正二年)

朝鮮沿海	關東州沿海	露領沿海州及 露領薩哈噠	其 他	計
東 北 全 國 九 州	三、六三八、五七九 一、四九二、五三五	一五八、一九八 六〇、〇〇七	五、六五、七二六 一三、三七九、九三五	五、六五、七二六 一三、三七九、九三五
		一、〇〇〇	二、〇八七、九九六	三、六四一、五三八

遠洋漁業に依る漁獲高は東北は五十六萬五千七百餘圓、九州は三百六十四萬一千五百餘圓にして全國の一千三百三十七萬九千九百餘圓に對し東北は四分にして九州は二割七分に當り東北は九州の六分の一に過ぎざるなり是に由りて之を觀れば九州地方の漁業者か如何に對外的發展の氣勢か旺盛なるかを推知するこゝとを得へく東北の漁業者は之に鑑みて大に發展期待する所なるへけんや半谷清壽氏嘗て東北地方漁業の振はざるを嘆して曰く「今日まで東北人は遠洋漁業に従事するもの絶對に之れなかりしかと云ふに決して然らず唯た其の之に従事するや漁主として従事するにあらずして雇漁夫として従事せしに過ぎず蓋し東北人が漁主たる地位に立たずして雇漁夫たるに過ぎざる所以のもの他なし東北人は一般に海を恐れ海を忌み海を遠からんとし智者富者の如きは先づ第一に海に遠かりたる爲め多少の資本を要する漁主たるものなく唯た僅かに海邊に生長し

たる漁夫の他の雇ふ所となりて漁業に従事せしに外ならず」と寔に其の言の如くにして何人も之を首肯するに躊躇せざる所なるへし然り而して遠洋漁業を起さんとするには第一に漁船漁具の完備を要し之に多額の固定資本を投せざるを得ざるを以て現今の漁民の經濟状態にありては容易に之を實現し難きものあり之に對する方策の如きは今後深甚なる注意を拂ひて講究すへき事項に屬するなり。

第六 水産物加工

水産物の加工たるや近時著しく發達し水産物を機械的装置又は氷雪藥品等の作用に依りて凍結せしむるか如き或は蒸汽乾製の如き或は罐詰の如き或は燻製の如き其の加工の種類頗る多く又従來は廢物として殆ど顧みられざりし物も近時は之を利用して或は肥料に製し或は工業用品を造り或は藥劑の原料に供用する等新たに需要の途を開拓し品質を佳良にし價格を低廉にし其の産額を多からしめむとするの必要より水産物の加工は今や經濟上輕視すへからざる問題となるに至れり今東北地方に於ける水産物の加工は如何なる状況にある乎を知る爲之を全國及九州地方と比較せむか。

水産物の加工 (大正二年)

東 北	食 料 品	肥 料	魚 油	澁 海 藻	計
東 北	三、二〇五、〇五四 _円	四五八、二〇四 _円	一七七、二三五 _円		三、八四〇、四九三 _円
全 國	三六、六九四、四六九	一三、八〇二、二六四	九九七、八五三	二三一、九八八	五一、七二六、五七四
九 州	六、四七七、二三四	一、一〇二、一九二	一五八、三一七	三六、二三七	七、七七三、九八〇

水産物加工品の價額を比較すれば東北は三百八十四萬四千九百九十三圓九州は七百七十七萬三千九百八十圓にして全國の五千七百七十二萬六千五百七十四圓に對し東北は七、%四九州は一、五、%〇にして即ち九州は東北の二倍を産出す而して其の加工品の種類は地方に依り異なると雖も之か主なるものを舉ぐれば左の如し

食 料	
節類	鯉節、鮪節
素乾	鰻、鱈、身、缺、鯧、田、作、鱈
鹽乾	真、鯧、背、黑、鯧、鱈、文、鰯、魚、秋、刀、魚、鯖、鮮、鱈、鱈、鱈、鱈
煮乾	真、鯧、背、黑、鯧、海、參、鮑、鱈
燻乾	鱈 (岩手縣より少量の産出あるのみ)
鹽製	真、鯧、背、黑、鯧、鱈、鮪、鮭、鱈 (鮭鱈は九州より産出なし)
肥料	鯧、搾、粕 (東北) 鯧、搾、粕、乾、鯧
魚 油	鯧、油 (東北) 鯧、油
澁海藻	(九州)

更に東北六縣の産出額を各縣別に表示すれば左の如くにして宮城岩手の二縣

最も多く青森縣最も寡なし。

東北六縣水産物加工産額 (大正二年)

縣	食料品	肥料	魚油	流海藻	計
福島縣	四〇一、〇五九	一六、九三三	六〇〇	—	四一八、五九二
宮城縣	九七八、九五三	八七、二〇六	一〇四、〇一六	—	一一七〇、一七五
岩手縣	九九三、四四〇	九五、六九〇	四七、五六八	—	一一三六、六九八
青森縣	六三九、七八九	一〇四、〇一五	一六、〇六二	—	七五九、八六六
秋田縣	六四、五〇九	二〇、九三七	一三	—	八五、四五九
山形縣	一二七、三〇四	一三三、四二三	八、九七六	—	二六九、七〇三

第七 製鹽

鹽を水産物中に加へ得へきや否やに關しては水産學者間に異論存すと雖も産業經濟の狀態を觀察する上に於て全然之を除外して顧みざるか如きは寧ろ當を得ざるの感なき能はず是の故に今東北地方と全國及九州地方の製鹽業に就きて左に掲げ参考となさん。

製鹽 (大正二年度)

區域	製造人員	從業者數	製鹽反別	煎蒸釜數	製造高
東北	三二二	一、八三七	九七、一	七〇	六、五三〇、三五三
全國	一〇、八九一	五四、八四九	五、九二五、三	六、七七一、一〇六六、六七七、七六二	—
九州	五、九三二	九、一九七	五五六、一	一、九三二	五六、五五一、六六三

即ち東北の産額は六百五十三萬斤餘九州は五千六百五十五萬斤餘にして全國の十億六千六百六十七萬斤餘に對し東北は僅に約百六十分の一に當り之を九州に比すれば約九分の一に過ぎず而して東北の製鹽地は宮城及福島之二縣に在るのみなりとす。

第八 漁獲物

本項に所謂漁獲物は人為養殖又は遠洋漁業に依るもの以外のものを指示するなり今之か東北と全國及九州との比較を見むか即ち左の如し。

漁獲物比較 (大正二年)

東 北	魚 類	貝 類	其他水産動物	藻 類	計
四、六〇六、四八二	五五四、三四九	八四二、八四七	三三七、九八〇	六、三四一、六五八	
全 國	七三、四一一、八五八	三、六七三、六九〇	一一、六六〇、三四七	五、三一九、九五三	九五、〇六五、八四八
九 州	一一、七四七、九二四	七三〇、五七九	二、八〇八、〇八八	三八五、六四〇	一五、六七二、二三一

其の價額を比較すれば東北は六百三十四萬一千六百五十八圓、九州は一千五百六十七萬二千二百三十一圓にして之を全國の九千五百六萬五千八百四十八圓に對すれば東北は六%七、九州は一六%五に當り即ち九州は東北の約二倍五分に上り著しき懸隔あるを知る更に之を東北六縣の各縣別に就きて示せば左表の如し

東北六縣漁獲物比較 (大正二年)

福島縣	魚 類	貝 類	其他水産動物	藻 類	計
一、〇七〇、九四二	一三、六六一	一五、五〇五	四二二	一、一〇〇、五三〇	

宮城縣	八七二、四八三	一一二、六三六	四二、九〇三	八七、七七八	一、一二五、八〇〇
岩手縣	八二六、六一〇	一五九、一八一	三一〇、〇六六	九四、三四九	一、三九〇、二〇六
青森縣	八六五、〇〇三	二四五、五四二	四〇七、二二二	一二九、五〇五	一、六四七、二七二
秋田縣	四九九、九一三	二、五六〇	二一、四九七	一七、三九八	五四一、三六八
山形縣	四七一、五三一	一〇、七六九	四五、六五四	八、五二八	五三六、四八二

之に依りて見れば最も多きは青森にして之に次きて岩手、宮城、福島の三縣稍多く秋田、山形の二縣は遙かに寡なし。

第九 水産

東北と全国及九州の水産額を比較すれば左の如くにして其の孰れを見るも東北は九州に比し遙かに及はざるを知る。

水産総額比較 (大正二年)

品名	全国に對する歩合			
	東北	全 國	九 州	東 北
漁獲物	六、三三一、六五八	九五、〇六五、八四八	一五、六七二、二三一	六、七
水産加工品	三、八四〇、四九三	五一、七二六、五七四	七、七七三、九八〇	一六、五
養 殖	一五〇、七四六	四、一五〇、七八六	三六三、二五一	一五、〇
遠洋漁業	五六五、七二六	一三、三七九、九三五	三、六四一、五三八	八、八
計	一〇、八九八、一二三	一六四、三三三、一四二	二七、四五一、〇〇〇	二七、二

本表の生産高は交互混合するものあり之を併算するは妥當を缺くべしと雖も比較上の便宜として合計額を付すこととなせり尙ほ前表の他寒天の産額東北に約二千餘圓全國に百八十三萬三千餘圓あるも比較計數より除外せり

尙ほ水産増進率を知る爲め左に最近五個年の事實を掲げて参考となさん。

水産累年比較

品名	大正二年		大正元年		明治四十四年		明治四十三年		明治四十二年	
	東北	全 國	東北	全 國	東北	全 國	東北	全 國	東北	全 國
漁獲物	六、三三一、六五八	九五、〇六五、八四八	六、〇八三、三三三	七、三三三、九三三	六、七〇九、〇六六	七、三三三、九三三	六、七〇九、〇六六	六、五三三、三三三	六、三三三、三三三	六、三三三、三三三
水産加工品	三、八四〇、四九三	五一、七二六、五七四	三、九七三、三三三	四、六六六、六六六	三、七〇九、〇六六	四、三三三、三三三	三、七〇九、〇六六	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三
養 殖	一五〇、七四六	四、一五〇、七八六	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
遠洋漁業	五六五、七二六	一三、三七九、九三五	四、五三三、三三三	五、三三三、三三三	四、三三三、三三三	五、三三三、三三三	四、三三三、三三三	五、三三三、三三三	四、三三三、三三三	五、三三三、三三三
計	一〇、八九八、一二三	一六四、三三三、一四二	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇

右の統計に依り累年の増加率を見れば左の如し。

水産累年増加率比較 (明治四十二年を100とせる指數)

品名	大正二年		大正元年		明治四十四年		明治四十三年		明治四十二年	
	東北	全 國	東北	全 國	東北	全 國	東北	全 國	東北	全 國
漁獲物	100	100	97	100	97	100	97	97	97	97
水産加工品	100	100	103	100	103	100	103	100	100	100
養 殖	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
遠洋漁業	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

明治四十四年
大正元年
大正二年

水産加工品

東北	一〇九	一二〇	一〇四
全国	九六	一二九	一〇〇
九州	九七	一三七	一三〇

明治四十二年
明治四十三年
明治四十四年
大正元年
大正二年

養殖

東北	一〇〇	一〇〇	九〇
全国	一一四	一〇九	一〇〇
九州	一三四	一〇九	一〇〇
	一一一	一〇九	一〇〇
	一一九	一四七	一四三

明治四十二年
明治四十三年
明治四十四年
大正元年
大正二年

遠洋漁業

東北	一〇〇	一〇〇	九〇
全国	一一七	一二六	一〇〇
九州	一三五	一二一	一〇四
	一八一	一六三	一〇四
	一六三	一三七	一三九

明治四十二年

明治四十三年
明治四十四年
大正元年
大正二年

東北	一三六	一一一	一〇三
全国	一七四	一一四	一〇六
九州	七四	一一一	一九三
	九三	一七一	三二六

是に由りて之を觀れば水産物中の大部を占むる漁獲物に於て東北は全國平均及九州に比し遙かに増加率低く又水産經濟上最も其の産額の増加を期待すべき水産加工品の如き亦然り若し夫れ遠洋漁業の漁獲物に至りては殆ど霄壤の差あるを見るへし唯だ養殖の増加率に於て他に超ゆるものあるを見る而已なり是れ輒ち養殖に適する湖沼等の他に比して遙かに多き關係上自然の理數ならむ乎更に東北六縣の累年水産額を各縣別に示せば左表の如し。

東北六縣水産累年比較

漁獲物

縣名	大正二年	大正元年	明治四十四年	明治四十三年	明治四十二年
福島縣	一、一〇〇、五三〇	一、〇二二、二九七	一、三八八、七五〇	七八四、九一二	一、一四六、一三五
宮城縣	一、二二五、八〇〇	一、一六七、一六五	一、二一九、八五四	一、四〇一、二七九	一、四三七、四八三
岩手縣	一、三九〇、二〇六	一、四六六、五六二	一、五八八、四三五	一、二八八、四二七	一、〇八五、二七七
青森縣	一、六四七、二七二	一、六八九、六七七	一、七五七、八〇八	一、九三一、六六八	一、五三八、八六九

秋田縣
山形縣

五四一、三六八
五三六、四八二
三九一、二一六
五七一、三一四
六三七、一一七
五四三、〇二九
七七三、〇三六
五三一、五八四
六八二、八八九
六六六、七三六

三二

水産加工品

福島縣
宮城縣
岩手縣
青森縣
秋田縣
山形縣

養殖

大正二年	大正元年	明治四十四年	明治四十三年	明治四十二年
四一八、五九二 一、一七〇、一七五 一、一三六、六九八 七五九、八六六 八五、四五九 二六九、七〇三	四三九、九三五 一、二二二、二二八 九九四、七〇三 九〇八、三三三 八四、四三六 二七八、三〇八	六三五、四一一 一、四二一、四一四 一、〇四、二四五 九七七、五二二 三一、八六九 一九五、六二八	四二〇、四六三 一、一三〇、八四三 九八〇、二九七 九五九、六二二 四一、〇二七 一八一、六八五	五五四、四一八 一、〇五二、三七八 六八四、三八三 七二〇、〇二七 二一、八八二 二〇五、七九八

福岡縣
宮城縣
岩手縣
青森縣
秋田縣
山形縣

遠洋漁業

大正二年	大正元年	明治四十四年	明治四十三年	明治四十二年
一一、二二二 八一、八七七 一一、六二一 五五六 二二、六〇四 二〇、三七一	二六、三五〇 九〇、七五六 一七、四四八 六九六 八、三九〇 二二、五六二	一八、〇二〇 七二、一二七 一三、七八一 七九四 一五、三四九 二一、九五三	一一、三三六 四八、二九六 一一、九四三 五八〇 一四、四七五 一八、九一一	一一、二八八 三五、五六二 一一、二六五 六一二 一三、五一四 一七、六六七

宮城縣
岩手縣

大正二年
五六〇、四五六
五、二七〇
大正元年
四三四、一四八
一一、九〇七
明治四十四年
九七四、三一五
八五、三〇五
明治四十三年
七五七、一六一
七二、五〇五
明治四十二年
五二三、八九六
八五、七五三

右の統計に徴すれば東北の水産年額は約一千萬圓にして生産總額の百分の三餘に過ぎざるなり願ふに東北地方の水産業は將來大に發展すへき餘地を存するや疑を容れずと雖之か發展の方策たる第一に資本の供給を奈何にして潤澤ならしむへき乎を講究せざるへからず即ち漁民の經濟狀態は農工業に比するときは概して貧弱なるか故に漁船漁具の改良等に資本を投すへき餘裕を有せず又農工業者の如くに有形の擔保を有せざるのみならず無形の擔保即ち信用も甚だ薄弱なるを以て低利に資本の融通を受くること困難なる等漁村特殊の事情を存するを思はは之に向つて輕々に憶斷を下す能はざるなり是の故に吾人は之等資本の需給關係に就きては更に之を講究せんとす。

第十 免許漁業

東北に於ける大正二年未現在の免許漁業数と全国及九州に於ける其れとを比較すれば左の如し。

東 北	全 国	九 州	免 許 漁 業 数 (道廳府縣の免許に係るもの)			
			定置漁業	區劃漁業	特別漁業	計
二、九〇九	二七、八七一	三、一一五	五二四	四五一	三、八八四	
五、五九二	一、〇〇〇	二〇、五七九	五、五九二	四、〇九四	五三、八四四	
一、〇〇〇	四、〇九四	八、二〇九	一、〇〇〇	四、〇九四	一、〇〇〇	
三、一一五	三、一一五	三、一一五	三、一一五	三、一一五	三、一一五	
三二八	三二八	三二八	三二八	三二八	三二八	
五二一	五二一	五二一	五二一	五二一	五二一	
三六二	三六二	三六二	三六二	三六二	三六二	
九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	
五三六	五三六	五三六	五三六	五三六	五三六	
二五二	二五二	二五二	二五二	二五二	二五二	
四六	四六	四六	四六	四六	四六	
一三	一三	一三	一三	一三	一三	
一四	一四	一四	一四	一四	一四	
九五	九五	九五	九五	九五	九五	
四八	四八	四八	四八	四八	四八	
六	六	六	六	六	六	
一三五	一三五	一三五	一三五	一三五	一三五	
五三	五三	五三	五三	五三	五三	

第十一 水産関係組合

東北に於ける大正三年二月末現在の水産業に関する各種組合数と全国及九州に於ける其れとを比較すれば左の如し。

水産関係各種給合法人数

東 北	全 国	九 州	水産関係各種給合法人数				
			漁業組合	水産組合	水産組合聯合會	同業組合	民法第三十四條に依る法人
三六二	三六二	三六二	三六二	三六二	三六二	三六二	
一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	
二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	
二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	
一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	
一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	
七	七	七	七	七	七	七	
三、九三〇	三、九三〇	三、九三〇	三、九三〇	三、九三〇	三、九三〇	三、九三〇	
八二五	八二五	八二五	八二五	八二五	八二五	八二五	
四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一	
一〇五	一〇五	一〇五	一〇五	一〇五	一〇五	一〇五	
六六	六六	六六	六六	六六	六六	六六	
一〇三	一〇三	一〇三	一〇三	一〇三	一〇三	一〇三	
三五	三五	三五	三五	三五	三五	三五	
一二	一二	一二	一二	一二	一二	一二	
四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	
一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	
六六	六六	六六	六六	六六	六六	六六	
一〇四	一〇四	一〇四	一〇四	一〇四	一〇四	一〇四	
三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	
一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	

仔細に觀察すへき必要ありと雖も今は先づ其の數を掲ぐるに止め他日更に詳密なる調査を試みむと欲す。

大正四年十月十九日印刷
大正四年十月二十五日發行

東北振興會

發行者 吉池慶正

東京市牛込區市谷柳町三十五番地

印刷者 島連太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷所 三秀舍

東京市神田區美土代町二丁目一番地

終